イエスタデイ・セレナーデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イエスタデイ・セレナーデ

【Nコード】

N7446X

【作者名】

【あらすじ】

ほんの些細な偶然から出逢ったふたり。

恋は自然と愛へ変わり

やがて……

ある日の午後

「雨、止みそうにもないですね」

聞き逃してしまいそうなくらいに小さな声だった。

「そうですね」

僕が相槌を打つように返すと、彼女は言葉を続けた。

「私、雨の日は嫌いになれないんです。何故だかわからないけど、とても懐かしい感じがして」

「懐かしい？」

「変、ですよね」

「そんなことはないですよ」

「本当ですか？」

「そういう気持ち、何となくだけどわかります」

「良かった」

彼女は安心したような微笑みを浮かべた。

僕は彼女の思いを聞きながら、窓を滑るように流れていく雨の滴を見ていた。

近くて遠い彼女の横顔が、視界の中でいつまでも揺れていた。

雨が街を濡らしていた。

細かな雨は路上に幾つもの小さな窓を作っていた。

その窓に映る灰色の空は、どれも雨粒が織り成す波紋で歪んでいた。環状線は飛沫をあげて走り交う車が列を成していた。

歩道はカラフルな雨傘が灰色の街並みを彩っていた。

街は自然の光を失った代用に、昼間だというのに人工的に造られた明かりでライトアップされている。

僕はテーブルを挟み、彼女と向かい合うようにして座っていた。

心は報われない喪失感と困惑の中にあった。

彼女は肩下まで流れる髪を指先でなぞってみたり、缶ジュースを口に付けたりしながら、時折僕と目が合うとはにかむように微笑んで見せた。

その度に僕も微笑んで返した。

不器用に釣り上げられた僕の口元は、さぞかし滑稽に見えていたかもしれない。

言葉少ない緩やかな時間が流れていた。

『里美です。明日、映画見に行かない？ 時間は……そうね、渋谷駅東口のバスターミナルにお昼の11時で。今夜は10時くらいまでなら起きてるから、都合が悪かったら連絡して？ じゃあ明日ね』

仕事から帰宅して、留守番電話に残されていた里美からのメッセージを聞いた時には、既に夜中の12時を回っていた。

「都合を考えてくれるなら、数日前に言ってくれたらいいのに」

などと電話機に向けて言ってみたりする。

もちろん、何か返事があるわけも無く。

言葉に出来ないやり切れなさが、溜め息となって体から抜けていった。

冷蔵庫から缶ビールを取り出し、喉の奥へと流し込んだ。

冷えた缶を持つ指先の感覚が変わっていく。

窓の向こうには、アンバランスな街の灯りが点在していた。

明日の約束に間に合う時間に起きられるかどうか……

そんな気掛かりが胸をかすめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7446x/>

イエスタデイ・セレナーデ

2011年11月14日00時04分発行